

「悲しみを支えられるか？」

被災地集団パトロール 男性警察官

平成7年1月17日阪神淡路大震災を、警察官として経験した私は、東日本大震災の出動要員の一人として名乗りを上げました。

阪神淡路大震災の時は、地震を体感・体験し、職場に向かう途中に見た長田区の火の手で、地震の大きさに恐怖を感じ、現地では手の付けられない状態の中、もがきながら徹夜の救助活動に従事しました。一段落した私に待っていたものは、900世帯にも上る仮設住宅の担当だったのです。仮設住宅の居住者は家を失い、家族を失い、途方に暮れる人々の集まりでした。巡回連絡では、家族構成等を聴取、被災体験を聞き、困り事に耳を傾けましたが、自分自身が地震体験していたので、さほど重々しい気持ちにはならなかったように思います。

今回は宮城県岩沼警察署に約1か月派遣されましたが、管区機動隊・機動隊の経験を持つ私でも、24時間二交替制勤務であり、体調管理には苦勞しました。

派遣先では、仮設住宅を巡回し住民要望を把握することと、夜間の街頭防犯パトロールが任務でしたが、被災地の現状を目の当たりにして、震災の悲惨さがひしひしと伝わってきたのです。仮設住民の声を聞く内にそれは益々強く感じられました。

仮設住宅では、環境が変わり体調を崩す高齢者や、家族離れ離れの生活を余儀なくされた子供がいました。被災者は口々に「地震は大したことはなかったが、あの津波は恐ろしかった。」と話すのです。その表情に恐怖心は表れていませんでしたが、皆が心の奥に強く刻んでいたに違いありません。その一つが、ある母親の話です。その母親は表情も変えず、その体験をこんな風に話してくれました。

「娘の中学校卒業式の日で、式を終えて公民館で謝恩会を開こうとしていた時、地震が起きました。津波警報が出たので、娘と自宅に帰り高齢の母・愛犬を車に乗せ避難している途中、遠くの海側から黒ずんだ津波が後を追ってくるのを見たのです。難を逃れた後、中学校に残り後片付けをしていた息子のことが心配になり探したのです



仮設住宅立ち寄り

パトロールカード

ごんごが、機動隊警察に派遣されています
兵庫県警の

で、

月 日 年組・年組 組 分ごう

お電話の巡回をパトロールしました。
 兵庫県ありまさんでした。

不審な人を見かけたら、119番又は下記ご連絡先へ
ご連絡先

配布者



が見つからず、学校近くで遺体として発見されました。あの時、私が学校に息子を迎えに行き、さえいれば、助かったのだらうと思っています。」という話でした。私ですら話を聞きながら目が潤む思いだったのですが、彼女は涙一つ見せなかったのです。震災から3か月が経っていたので、心の整理が出来掛けている時期であろうと思われるかも知れませんが、その歩く姿、仕事に就こうとしない無気力さを見た私には、心の痛みは計り知れないくらい大きいものになっているのだらうと感じられました。これが俗に言うPTSD（心的外傷後ストレス障害）なんだと痛感させられました。

被災者に対して私達に出来る事は、話し相手になり、ただただ話を聞いてあげることだけでなく、無力さを感じていたのですが、あまり外出しない高齢者を訪問した際、訪問する度に笑顔で温かく迎え入れてくれた姿を見て、自分たちのやることが見つかった思いがしました。

1か月もすればこの地を離れる私達に何か出来ることはないか、結果として残していけるものはないかと考え、「住民の輪を創る」ことをテーマに活動し始めたのです。幸いにも

仮設住宅集会所にはボランティアが詰めて多彩な活動をしていたので、ボランティアを支援し、「集会所に集まりみんなで話をしよう。」と全世帯をまわって提唱しました。当初は怪訝な顔をしていた人も、顔を見る度に明るく微笑み話し掛けてくれるようになっていきました。

家に引きこもりがちの人も、声掛け一つで笑顔になり参加者も増えた時、こんな事でも役に立つのだと感じました。

現地を後にする私達は、ほんの少しでも被災者の役に立てたのだと胸を張って帰県しましたが、被災者にはまだまだ計り知れない傷跡が残っているに違いありません。今後も思いだけでも支援し続けたいと思っています。



被災地のパトロール